

【要旨】

主体機能の顕現に関する心理臨床学的研究 —イメージ体験における身体感覚の視点から—

片畑真由美

2014年

本論文は、心理臨床事例Aで見られた「したいことが“ない”」「箱庭のアイテムを置くことができない」という現象から、従来は心理臨床面接で自明なものとして扱われている「クライエントが自らのイメージを表現すること」は、自明のことではないのではないかという疑問を抱いたことから着想された。すなわち、本論文の目的は「イメージを表現することがなぜ心理的な治療に結びつくのか」、「イメージを表現しようとするとき、人はどのような体験をしているのか」、そのメカニズムを明らかにすることである。そして、その検討プロセスにおいて、心理臨床面接における「主体機能」の現れと「身体感覚」が果たす役割について注目することになった。

序論では、心理臨床学において表現される「イメージ」は、何が見えた以前に、それが「個人にとってどのような意味をもつか」という「独自性」が重視され、「それがどう表れて、どのように捉えられたか」という「内的」かつ「感覚的」な「体験」の側面が重要視されるものと述べた。そこで、本研究では「イメージ」を表現されたものや客観的な指標からではなく、どのような体験が起きているかという「内的体験」の観点から検討していくことにした。その際、イメージ体験に密接に関係している、身体や身体感覚の視点を考慮に入れる必要があると考えられた。しかしながら、「体験」とは、はっきりと言語化可能なものもある一方で、当人でさえも捉えることが難しく、なんらかの「感じ」としてしか残らないような漠然としたものも含まれるため、心理臨床において重要であるにも関わらず、研究の俎上に乗せることは困難であることを指摘した。

そこで、本論文では「心理臨床事例」と、「調査事例」という二種類の事例を提示するという方法をとることにした。「心理臨床事例」とはセラピストとクライエントの関係性が基礎となって起こる心理臨床面接における現象を指し、それを通してクライエントが何かを表現するときどういうメカニズムが働いているかを検討することにした。他方、「調査事例」とは、調査面接の限定された枠組みの中で見られた現象のことを指し、心理臨床事例では捉えきれない瞬間的な体験が具体的に検討できるものと考えられた。この二種類の事例を基にして章ごとに考察していき、そこで見出された視点を次の章で別の事例を用いて検討し、考察を深めるという立体的かつ重層的な研究を行うことにした。

まず第I章では、心理臨床事例Aで見られた現象に即して「箱庭制作」に焦点を当てて、

調査による数量的検討を行うことにした（調査①）。その際、箱庭制作において、アイテムを置く位置を決めるには「ぴったりとした感覚」（ぴったり感）が重要であり、その感覚には「身体感覚」が影響しているのではないかと考えた。調査①の方法としては、アイテムを一つに限定して、それを置く位置を決めるという箱庭制作課題を用い、触覚の媒介の有無、さらには「砂に触るか」「アイテムに触るか」という条件を設定して、箱庭制作体験の違いが見られるかについて数量的指標を用いて検討することにした。

その結果、箱庭制作体験については、(1) 触覚を媒介した方が「ぴったり感」を体験し、より「イメージ通り」であると感じたこと、(2) アイテムの触覚はイメージの「明確さ」を高めること、(3) 砂の触覚は「満足感」を高め、「動的」で「開放的」な感じが強まることの3点が示された。この結果から、イメージ体験における身体感覚の役割とは、そのイメージ体験のプロセスにおける「ぴったり」した感覚に影響するものであり、結果として「満足感」や「明確さ」などに影響すると考えられた。以上のことから、「ぴったり感には触覚が影響を及ぼしていること」そして「箱庭制作には何らかの制作者の“内的体験”が基準になっていること」が明らかになった。

しかし調査①で得られた内観からは、一つのアイテムの位置を決めるまでに、より微細なプロセスがある可能性が考えられた。つまり、イメージ体験を捉えるためには、一つの言語報告がなされるまで、そして数量として変換されるまでに、どのような経緯や背景があるのかについて検討することが課題として残された。

それを踏まえて、第Ⅱ章では制作者の「内的体験」をより詳細に検討するために、箱庭制作における「アイテムの位置を決める」体験の中で、制作者に起こってくる「身体感覚」に注目し、インタビュー調査を行うことにした（調査②）。方法としては、予めアイテムを一つに限定し、(1)それを置く位置を閉眼状態で決定した（イメージ場面）あと、(2)イメージ場面に沿って実際にアイテムを置く（実際場面）ように教示し、(3)その二場面での体験についてインタビューを行う、という手続きをとった。

その結果、イメージ場面では(1)多くの場合はアイテムの位置は瞬間的に決定されること、(2)ただし、選んだ位置以外にアイテムを移動すると、「違和感」としか言えないような実感が起きることが明らかになった。また、(3)実際場面では、視覚や触覚などの五感の影響によってイメージ場面で感じていた感覚が変化することが報告された。

これらの結果を身体感覚の観点から考えてみると、決定した位置、選ばなかった位置に対して、制作者がそれぞれに何らかの「感じ・感覚」を言葉にならない状態で漠然と感じていること、最終的に位置を決定する際には制作者が位置に対して賦活された感覚を感じ比べて、それを基にしていることが明らかになった。つまり、箱庭制作においては「触覚」や「視覚」のような分化した五感が大きな影響を及ぼしていると考えられるが、それ以前により未分化な「体感」や、極めて主観的な感覚が基にあると推測された。

また、調査事例 a を取り上げて、イメージ場面ではかなり強い「ぴったり」した感じを

抱いて位置が決められ、その際は「自分の中（腹部）に（箱庭が）あった」と感じられた現象に注目した。調査事例 a からは、(1)箱庭制作過程では身体感覚に近い感覚が賦活され、アイテムや置く位置に制作者自らの意味を付与していき、制作者独自の意味を帯びてくること、(2)制作者は実際の箱庭の構図と内的感覚の一致を求めているというよりは、まず自分の内的感覚内で「違和感のないところ」「一致感」を探るプロセスがあること、(3)「自分の中に箱庭が入っていた」と感じるような主観的な感覚は、「視覚」や「触覚」などの実際の身体感覚によって影響されること、この3点が明らかになった。

第Ⅲ章では、調査事例 a で見られた「自分の中に箱庭が入っていた」と感じるような主観的な身体感覚と、「視覚」や「触覚」などの実際の身体感覚に注目することにした。そして先行研究から、身体感覚を考える際には、イメージレベルで起きる「身体感覚イメージ」と、実際の知覚としての「実際の身体感覚」の二つの視点が必要であることが考えられた。

それを検討するために、この章では調査事例 b を取り上げることにした。b は、イメージ場面では「異次元」と感じられていた箱庭が、実際場面になると「異次元でもない」し、「完全に現実」だと感じ、自分の「ファンタジーは否定される」と報告した。さらに、b は自分の身体が存在を意識することによって生じた、イメージ場面と実際場面でのズレを「全部自分に跳ね返ってくる」と、結果的に主体的に決定を引き受けることとして体験したことが明らかになった。つまり、b にとって自身の「実際の身体感覚」を知覚することは、主体的な意思決定をすることを意識させるものであると考えられた。

さらに第Ⅳ章では、「自分がしているのではなく、勝手にアイテムが動く」と自律的にイメージの動きを感じた調査事例 c を取り上げて、その現象の背後に主観的にそうとは気づかれないまま、自律的にイメージを「表現しようとする主体」の存在を仮定することにした。そして、先行研究から「主体」は実体として把握されるものではなく、「動き」であり、「エネルギー」であると考えられたことから、「機能」として捉えることの重要性を述べた。

また、この章で取り上げた調査事例 c は b とは異なり、実際場面で感じたズレについて「自分で動かすのが楽しかった」と、イメージ体験を主観的にも主体的なものとして再確認したという報告が見られた。このことから、「実際の身体感覚」は「自律的なイメージ」をある程度制御し、自分自身の体験だと実感させる役割を持っていることを指摘した。

以上の検討を踏まえて、調査事例からは、(1)主体には、主体にとって十全な表現をしようとする「主体機能」があるのではないかということ、(2)主体の機能とは、自律的なものが多く、意識としては受動的に感じることも多いこと、(3)イメージ体験において、ぴったりの感覚を得るためには、「身体感覚イメージ」が重要になってくることが推測された、それを踏まえて、(4)「主体機能」とは外界に対して意味付与し、さらには主体が受ける刺激を「自分」の体験であると「実感」させ、それを主体に感得させようという働きではないかと考察した。

第V章では、これまでの章から得られた視点を心理臨床事例Aの面接過程に沿って再検討することにした。そのために、心理臨床事例Aの面接経過を「Aの主訴」を考えるとところから、2人で「身体感覚イメージ」を共有した上で、「身体感覚イメージ」を軸にしたやり取りを行ったこと、そして「イメージ体験」を区切るものとして「言葉」が必要になり、その「言葉」がクライアントとセラピストのコミュニケーションツールとして徐々に機能していく過程に注目して振り返った。

その結果、「遊ぶものが選べない」「箱庭が置けない」という現象は、身体症状が激しいAの「身体感覚イメージ」の不確かさに由来するものではないかと考えられた。つまり、身体感覚の感得しにくさは、主体の機能しにくさにつながり、何かを表現することの困難さに繋がっている可能性があることを指摘した。そして、心理臨床面接においては、「身体感覚イメージ」をセラピストとクライアントが共有するというプロセスが見られ、それを前提にしてクライアントは主体を表現する媒体として「言葉」を機能させていくことが想定された。

これらから、調査事例とは異なり、心理臨床事例では主体の機能が見えにくく、表現に至るまでの微細な段階を提示するものと考えられた。そして心理臨床面接においてクライアントの主体が機能するためには、身体感覚レベルでの実感をいかにセラピストと共有してくかが重要になると考えられた。そのプロセスを通じて、「言葉」がクライアントとセラピストのコミュニケーションの道具として機能するのではないかと考察した。

第VI章では、第V章を踏まえ「主体機能の現れおよび賦活化は、心理臨床面接で生まれる人間関係の要因により促進できるか」という仮説を検討するために、「したいことがわからない」という主訴をもって来談した心理臨床事例Bの面接過程を取り上げた。面接過程初期はAと同様にコミュニケーションが成立しにくかったが、面接過程の中で自分の「好きなこと」をセラピストに語り共有することで、それが「自分の軸」と意味付けられ、また「自身の身体（の不調）」についての意味付けが行われていった。また、徐々に激しさを増す身体症状についても、それを「言葉」にすること自体が「身体感覚イメージ」を作り、他でもない「自分」という実感を得るプロセスになることが想定された。

この経過を考察した結果、面接においてセラピストに自分のことについて語ることは、クライアントの世界を区切り、同時に区切られた自分を対象化する過程となり、「他人」を代表するセラピストとも繋がる通路を作ることになったと推測された。それはBにとっては「自分の存在」に対して意味づけようとする動き、つまり「生きる意味」を問うという形として現れたと考えられた。その「意味を問う」ことが原動力となって、セラピストとの間でBは「自分の感覚」を実感しようとし、他でもない「自分という固有の存在」を他者との間で拓いていこうとする動きが、面接プロセスでは起きていたのではないかと考察した。その結果、Bの面接過程からは「他者」の存在が明確に実感され、その「他者」か

らの働きかけにより「自分」という存在を再確認するという、能動的かつ循環的な人間関係を築こうとする、その萌芽が見られたと考えられた。

取り上げた二つの心理臨床事例からは、(1)主体が機能しにくい状態とは、何かに意味づけたり、何かを選択することが困難であるという状態として現れるということ、(2)クライアントの身体症状が激しい場合、身体感覚が主体機能の基盤になり得ていない可能性があることが推測された。それを踏まえて、(3)心理臨床面接では「身体感覚イメージ」をセラピストと共有していくプロセスが必要となり、(4)他者であるセラピストとの関係を通して、クライアントは自分が他者とは異なり、独自の「身体」を持つ「自分」という実感を得ることが重要であると考えられた。

以上のことから、心理臨床面接における主体機能の顕現とは、クライアントが「ほかでもない自分」を形作り、それを実感していくのと同時に、「自分以外の他人」を実感し、それとつながろうとする、その瞬間ではないかと考えられた。これを踏まえると、心理臨床面接とはクライアントが「自分が自分である」と実感するために、主体機能を賦活させるプロセスであり、その中でセラピストがクライアントにとって「感覚を共有できる」他者の役割を果たすことが重要であると考えられた。よって、心理臨床面接においては主体機能を賦活化していくプロセスが必要となり、最終的には主体機能をクライアントが内在化していくことが重要になると考えられた。

終章では、序章で取り上げた疑問点を再考察し、「主体機能」に関する心理臨床学的意味について、次のようにまとめた。心理臨床面接においてクライアントが自分のイメージを表現することは、「他者と繋がると同時に、他者とは違う自分を実感する」という意味をもつ体験であること、すなわちそれは「他者との間で自分を拓こう」とする主体機能の現れであると考えられた。つまり、イメージを表現する前の段階に目を向け、クライアントの主体を機能させていくことが、心理臨床面接の核になるのではないかと結論づけた。

(5843 字)